

学園ニュース

富山大学

NO. 63

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学

平成元年 3 月 15 日



学内風景（その27）新人文学部校舎 撮影 佐藤 進

~~~~~ 目 次 ~~~~~

|                         |                          |    |
|-------------------------|--------------------------|----|
| 新黒田講堂を飾る緞帳 .....        | 2                        |    |
| 卒業生へのはなむけの言葉 .....      | 各学部長及び経営短期大学部主事 .....    | 3  |
| 定年退職者のあいさつ .....        | 10                       |    |
| 親任教官紹介及びあいさつ .....      | 17                       |    |
| スタンフォード大学 .....         | 教育学部助手 丸山 茂徳 .....       | 18 |
| 小国ベルギーとヨーロッパ合衆国 .....   | 理学部教授 松浦 郁也 .....        | 19 |
| 家畜になった日本人 .....         | 理学部教授 鳴橋 直弘 .....        | 21 |
| 「特定研究」疲労とセラミックス被覆 ..... | 工学部教授 塩澤 和章 .....        | 23 |
| 留学体験 .....              | 外国人留学生（工学部） 郭 錦祥 .....   | 24 |
| 地域共同研究センターだより .....     | 地域共同研究センター助教授 池野 進 ..... | 25 |
| 学部・学生部だより .....         | 27                       |    |



## 新黒田講堂を飾る緞帳



### 富山の黎明

これは緑豊かな文化と歴史のまちにあって、その学術的中心となる富山大学に新しく建造される講堂を飾る綴織緞帳のために「富山の黎明」と題してデザインされたものであります。

図柄は今正に明け行く春の富山平野と茜色に輝く新雪の立山連峰の壮麗な姿を幻想的に描き、未来に向って大きく飛び立とうとする若人の夢と希望が象徴されています。

綴織は、我が国誇る美術工芸の一つであり、工人の手の爪のみで織られるもので、その伝統的な技法によって織り出される豪華で格調の高い緞帳に大きな期待が寄せられる。

(原画製作者)

※ 新黒田講堂は、去る11月着工以来天候にも恵まれ、工事が順調に進捗し、竣工が待ち遠しいこの頃です。

このたび、コクヨ株式会社より新たに新黒田講堂の舞台設備として「富山の黎明」と題した豪華な綴織緞帳（上の写真のとおり 間口14m×天地7m）を寄贈いただくことになりました。

# 人文学部の卒業生諸君へ

人文学部長 三 寶 政 美



晴れて人文学部を巣立つ卒業生諸君並びに大学院を修了する諸君にこころからお祝い申しあげる。おめでとう。早いもので、今年度もこうした文章を綴る時期にもう至ったのかと、卒業する教え子たちひとりひとりの顔を改めて思い浮かべながら、この拙ない

一文を記している。

卒業を迎えて、諸君らの胸中に宿る思いは様々であろうが、自分たちの卒業年が奇しくも昭和（1926－1989）の終焉と遭遇したことにある種の感慨を抱いている人は少なくあるまい。諸君が昭和にいかよの思いを持つかは勝手といえばそれまでだが、もしや経済大国としてのひかり輝やく部分のみに目を奪われているとすれば、私はやはり私の暗い「昭和」をここで語りたい。といっても私自身昭和をまるごと生きてきたわけでないから、話は私の生きた限りでの「昭和」でしかないけれども。

私にとっての昭和は、昭和20年3月10日の東京大空襲が根っこになる。東京大空襲といっても、昭和も後半に生まれた諸君たちにとっては現代史の一片の知識でしかないだろう。史実によると、米空軍による東京空襲は昭和17年4月18日、ドーリットル中佐が指揮するノース・アメリカン「B25」16機による奇襲作戦から始まったというが、昭和19年にマリアナ諸島に「B29」機の発進基地が完成するや、東京都民はこの空の要塞B29重爆撃機の空襲に日常的に悩まされるようになる。前後してガダルカナルが落ち、アッツ島が玉砕し、またサイパン、グアムが米軍の前線基地と変り、今や米軍は怒濤の如く日本本土に迫ってきた。かくて昭和20年3月10日の真夜中、東京の下町一帯を炎熱の地獄図絵と化せしめた東京大空襲は起るべくして起きた一大惨事であった。焼夷弾は豪雨のごとく逃げまどう都民の頭上に降りそそぎ、わずか2時間20分の間に死者88,793名の犠牲者を出すという広島原爆に先立つ空前の大被害となったのである。ここで忘れてならぬことはこの8万余の死者が戦闘員でなく、市井に肩寄せ合って生きていた庶民であったことだ。私の

父、母、姉も含めて。

これより早く国策によって都下の小学生は強制的に疎開を命じられていた。疎開という言葉も今や完全に死語と化したので、一寸説明しておこう。疎開には地方の親戚縁者を頼っての縁故疎開と、クラス（学年）単位に地方に移動する集団疎開があった。銃後の小国民の生命を守るというものの、いずれにしても無謀な戦争政策の破綻に伴って、幼ない小学生が両親のふところから遠く地方に追いやられたことに違いはない。

私は下の姉と群馬県の山村に縁故疎開し、辛うじて東京大空襲から免れたが、学友たちもその後担任教師に引率されてどごぞ地方のお寺に集団疎開したと風の頼りに聞いた。従って私には集団疎開の経験はないが、のちに故向田邦子の『字のない葉書』を読んで、集団疎開の一端を知った思いがした。それはこんな作品である。「向田家は東京大空襲に罹災しなかったが、このままでは子どもたちが危ないというので、下の幼ない妹を集団疎開させることとした。出発という日、まだ満足に字の書けない妹のために、父はおびたらしい葉書に自分宛の宛名を書き、元気だったらマルを書いて一日に一枚づつポストに入れるようにと言いきかせた。妹はまるで遠足に行くようにはしゃいで出かけていった。数日して妹から第一通がとどいた。葉書いっぱいにはみ出るほどの大きなマルが書かれてあった。しかし日がたつにつれて葉書のマルはしだいに小さくなり、ついにバツに変わった。そしてぱったり途絶えた。心配した母が駆けつけてみると、妹は百日咳を患らい、虱だらけの頭で三畳の布団部屋に寝かされていたという」。

私のクラスに仲良しの武者君という学友がいた。子ども心にも、彼が沈着な性格と切れる頭脳の持主だと敬服していた。だから先生が彼を級長に任命した時も、不服を唱える者などいなかった。校門の斜め向いに、武者電気製作所と大きな看板のかかった家が彼の家であったと記憶している。敗戦の後、私はそのまま疎開先に居ついてしまったが、街角で××製作所なる看板を見かける毎に、武者君のことを思い出したりした。

やがて私も中年族になるにつれ、東京大空襲がしだいに記憶から薄れかけていったそんな頃、20数年ぶりに私は一冊の書物の中で武者君とそれも悲しい対面を

したのである。早乙女勝元著『東京大空襲』（岩波新書、1971年）を店頭で見かけ、早速買ったものの、よもや幼な友達と会えるとは思わなかった。だが、はからざるも私は武者君のご家族と相対したのであった。「武者みよさん（当時42歳）は、本所区堅川4の2の武者電気製作所社長武者栄氏の妻で、夫妻には12人の子どもがいた」（第一章「出産の夜」）で始まる書き出しがそれである。いくら「産めよ殖せよ」の時代とはいえ、私は武者君に一ダースものきょうだいがいたとはつゆ知らなかった。みよさんが本書に取りあげられたのは、この東京大空襲の直前に13人目の赤んぼうを無事産んだからである。みよさんが臨月のおなかをかかえて本所区緑町にある相生病院に入院したのが3月9日の午後3時。陣痛は折悪しく警戒警報のサイレンとともに始まった。分娩室はライトが外に洩れぬよう何重もの黒布でおおわれるという異常なふんい気の中で、11時7分女兒出産。産婦がほっとする間もなく、緑町一帯は完全に焼夷弾の雨に包圍され、みよさんは生まれたばかりの赤んぼうを抱きしめタンカに載せられて猛火の中を避難し、母子ともども奇跡的に生きることができたのであった。しかし、武者家の祖父母、栄氏そして12人の子どもたち計15人のご家族は

避難した防空壕の中で焼け死んだ……。

当時高等女学校の学生であった私の上の姉も両親ともどもこの夜焼死した。この姉はその直前まで私たちと疎開先に居たが、工場に学徒動員されているクラスメートに申し訳ないと言って、東京に戻った直後にやられた。死に行ったようなものであった。あの時、私が両親に会いたいと姉にせがんで一緒に行ったならば、私も同じ運命に遭ったろう。私はたまたま生きのび、姉や武者君はたまたま死んだのである。これが戦争の残酷さというものである。

生残った者の中に生きる死者の存在／それは思い出の墓場には埋められず／つねに僕らの心の／いちばん深い所で生きている（壺井 繁治）

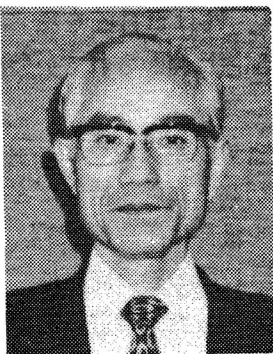
諸君の晴れの門出に当り、私はまたまた（昨年同様）暗い昔のことを書いてしまった。申し訳ないとは思いますが、昭和に訣別し、平成の新たなる海原に向って船出せんとする諸君が、安直に昭和と別れてほしくなかった。諸君が生まれてのち知った昭和は、実は庶民の死と悲しみの上に咲いたものだというのを頭の片隅に留めて、これからの前途を切り拓いて行ってほしかったのだ。ご健闘を祈る。



## 教育学部卒業生への言葉



教育学部長 野村 昇



教育学部卒業並びに専攻科修了の皆さん。この度、諸君は、研鑽の結果めでたく卒業または修了され、社会人としてまたは進学等に新たな第一歩を踏み出されますことを心からお慶び申し上げます。

そして、同時に、諸君を今日まで育て導いて頂きました

方々に対しまして、敬意と感謝の念を捧げたいと思います。

諸君の中の多くの方々が、恩師などの素晴らしい人間性との出会いを経験されて、子供を心から愛し、子供の発達を願い、また同時に自己実現を目指して富山

大学教育学部への進学を果たされました。そして、教養部での一年半の幅広い基礎素養の修得を経て、教育学部の専門課程に進まれ、それぞれの課程・教科を専攻し、学部性格からくる多様な過密な授業スケジュールのなかを終始熱心に勉学に励んでこられました。更に、教員養成の重要な部分として、子供の心身の発達と教育に関する学習・訓練のために教育実習に参加し、懸命の努力をされました。そのほか、合宿研修等にも参加して、大学内のみでなく、広く多くの他の機関の先輩教師方や幼児・児童・生徒方との出会いをもたれ、他の教場・施設や自然の中での学習と生活体験を積んで研鑽を重ねてこられました。特にこの一年間は、専門教育の締めくくりとしての卒業研究の厳しい審査を経て、ここに教育学士の称号を受けられたのでありま



す。

にもかかわらず、今日の日本は少子化現象で児童・生徒の減少にともなう教員需要減が厳しく、このため、諸君の教員志望に十分に答えられず、私達教職員は卒業生の皆さんの胸中を察して大変に心いたみます。欧米先進諸国においても同様の傾向にあるそうですが、今後は、生涯教育、情報教育、発展途上国の教育を含めての国際的な視野での対応なども考える必要があると思います。日本教育大学協会としては行政当局に小人数学級の達成等を願い出ているところであります。

さて、国内問題が国際問題と切り離して論じ得なくなつてはや久しいことは言うまでもありません。イラン・イラク戦争に代表された中近東の紛争や、南アフリカでのアパルトヘイト等の混乱に加えて、アフリカ等での飢餓、発展途上国での人口の急激な増加などの政治・経済上の不安事情が挙げられ、更にチェルノブイリ原発事故、オゾン層破壊、二酸化炭素による温室効果、窒素酸化物による大気汚染など、そしてその他、地震や種々の難病等々、人間が今後この地球に生存を続ける為に解決しなければならない課題が、目前に多くあります。このような課題の解決には、外に向かつての科学（ハイテクノロジー、バイオテクノロジー等の形而下的の科学）だけでなく、人類自体の責任に関わつての道義的な、内に向かつての追求（形而上的）も必要なことが極めて明白となつてきております。これを、別の比喩的な表現で、遠心的かつ求心的追求とすることが出来ますが、この両者の程良いバランスが大切だと思うのです。このバランスを平たく言えば、心身の均衡のとれた発達、内政と外交の両面での努力と成果、

自然科学技術・人文・社会科学と精神・芸術文化の広い領域に互つての発展などというものになると考えます。

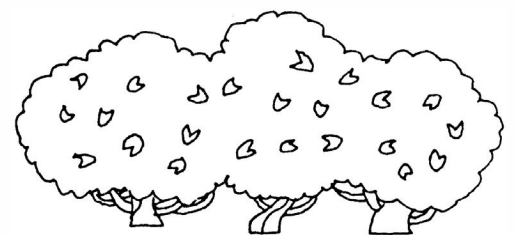
児童・生徒の心身の発達を願い、これについての学問・研究とその実践のあり方を長い間追求して、更にこれからも続けようとしている教育学部において、諸君も私も、上述した遠心・求心の両側面での一層の発展を願うとともに、特に広い視野と長い時間軸に基づく均整のとれた発達ということに心がけねばならない、これが教育学部の特質を生かすことでもあろうと考えているのです。いずれの場合においても、積極的に考えて行動する意欲と創造性、そして国際性が強く要求されています。

それにつけても、近年の諸科学の発達によって、宇宙・地球の全体像とか生命現象の素晴らしい仕組みについての秘密が少しずつ解き明かされつつあることに、深い感動と感謝の念を禁じ得ないのは諸君も同感されることでしょう。

このように考えてみますと、学問研究の重要性はもとより、勉学と思考を続けることの大切さをあらためて感じます。

まことに平凡な言葉であります。私どもの一人一人の力は小さくとも、それぞれが、人間のあるべき姿を追求し、人類の将来性を信じて協力して努力を続けるならば、「諸君の明日にも、人類の将来にも夢がある」ことを期待できるものと確信しています。

卒業生・専攻科修了生の皆さんがご健康で自己実現に努力を続けられますように念願しますとともに幸あれとお祈りいたします。



# 経済学部 経済学部の卒業生諸君へ

経済学部長 吉原 節夫



諸君、ご卒業おめでとう。  
まずもって、心から祝意を申し述べたい。

さて、長い学校生活を終えて社会人としてスタートする諸君に対し、「はなむけ」の言葉を依頼されたが、教え子に対する最後の「説教」ということになりそうである。この執筆の時には諸君が未だ在学中ということもあって、今の私の心境は、わが子の旅立ちを心配して色々と注意をしたがる親のそれに似ている。

まず、諸君に言っておきたいのは、「挨拶を大切に」ということである。私がここでいう挨拶とは、毎朝職場で上司や先輩と顔を合わせたときの「お早うございます。」とか、帰るときの「失礼します。」、「さようなら」というような簡単なものにすぎない。「お願いします。」、「ありがとうございます。」、「失礼しました。」、「あいすみません。」といった言葉を、入社（庁）の初日から、言うべきときにきちんと言わねばならない。

ここで、このような挨拶が新入社（職）員の諸君にもつ意義を少し社会科学的に考察しておく必要がある。その社会規範性を私は指摘しておく。諸君が入る職場においては、挨拶・礼儀・エチケット等のもつ社会規範性は強い。それに反して、諸君がいた大学では、それらのもつ規範性は弱かったといえる。それ故、カルチャーショックが心配されるので、もう少し敷衍しておきたい。

周知の「社会あるところ法あり」という法諺をもう少し広い意味で捉えると「社会あるところ社会規範あり」といえるが、社会規範の中に慣習・モラル、礼儀、エチケットなども含まれる。ところで、社会規範の特質は、それに反する行動が sanction（制裁）ないし reaction（反発）を受けることである。諸君の職場では、上司や先輩に対する挨拶や礼儀のもつ社会規範性が強いので、それを無視する態度に対してはそれだけ強い reaction がある。「礼儀知らず」「無礼」「不躰け」「傲慢」「不遜」「生意気」「教養が無い」といった人物評価に止まらず、規範意識の強い職場にあって

は、もっと強烈で直接的な「しっぺ返し」 retribution を受けるであろう。

他方、小学・中学・高校・大学と進むにつれ、諸君の学園生活では、挨拶、礼儀の社会規範性が弱くなっていたといえよう。いわゆる進学校では、概して受験勉強の方が重視されて、それが希薄になっている。また、大学では、「大学の自治」を標榜することから、自由、自律の考えが基本になっているので、一般に、それ程礼儀や挨拶を厳しく言わない先生が多い。研究に打ち込んでいるために、無頓着な方でもないではないが、大半は、自律社会たる大学に長く在籍しているので本来的に自由人となっている。かく申す私も、学校生活・大学生活以外に勤務したことがないから、挨拶や礼儀の面で十分でないと感じ自らを反省している。諸君も、上述のような社会的背景をもつ「大学卒新入社（職）員と挨拶」という問題を理解したうえで、入社（庁）初日から挨拶を大切にしてほしい。そして、若者らしく、てきぱきとした行動、めりはりの利いた言動をするよう心がけてほしい。

次に言いたいのは、いつも「短期的・中期的展望をもて」ということである。最近、1年そこそこで退職してくる大卒新入社（職）員が増えてきた。止むを得ない客観的事情が存在する少数例を除けば、ギブアップが早過ぎるという感じを否めない。一言でいえば、忍耐力不足。「石の上にも3年」と言うではないか。仕事や人間関係等でたとえ行き詰まりを感じたとしても、3年先・5年先を展望せよ。自分が変わる、相手が変わる、周囲の状況が変わる、という可能性が大いにある。また、先人の言葉の通り、「艱難汝を玉にする」。試練を経る毎に諸君の人間が大きく形成されることは間違いない。このように考えれば、「逆境不屈」の精神を維持できるであろう。

以上、諸君が入社（庁）後真先に対応しなければならないと思われる課題やピンチを慮って、前述の老婆心から拙い学部長告辞を送ることになった。これも現代の社会的状況のしからしむるところ、と自己弁護しておこう。

最後に、諸君自らが世界経済を含めた長期的展望を親しく語ってくれる日を期待している。ご健闘を祈る。



# 卒 業 生 へ

理学部長 小黒千足



卒業の季節になると、はなむけの言葉の中に「卒業して社会に出たら、もう今までのように甘やかしてはくれない。一人前の社会人として扱われるのだから、自分で責任をもて……」というのがよく出てきます。私はいつもこれを不思議に思うのです。その理由

の第一は、そのような訓戒をする人は「学生をいわゆる社会から切離し、甘やかしてきたのだろうか」ということです。少なくとも、大学の学生生活の後半は成年に達しているのですから、言動に対する責任は自身で持つのが当然です。もし本人の言動が他に迷惑を及ぼすようなことがあれば、あるいは自身で責任を取れないようなことが起これば、教師はそれに対して、いわゆる社会人と同様に厳しく対処すべきだと思います。それはまた、教師の責任ではないでしょうか。在学中に甘やかしておきながら、卒業のときにただ言葉として「社会に出たらそんなに甘くはない」と言ったところで何になるでしょう。たんに自分の教育の至らなさを覆い隠すための言葉のようにさえきこえます。

第二の理由は、その様な言葉を百万遍も繰り返しても、殆ど効果がないように思うからです。真の厳しさは、身をもって感じてはじめてわかるもので、卒業の時に聞いたことがすぐに実感として捉えられ、それに対処できるのであれば、世の中に苦労は随分少なくなるでしょう。戻るようですが、在学中の学生に対する態度が大切なのではないのでしょうか。

話はかわりますが、現代のヒトは大変甘やかされている動物です。多少失敗（いろいろな意味で）があってもそれが致命的になることはめったにありません。しかしながら、野性の動物（たとえ飼われている犬や

猫でも）の場合はヒトと違います。小さな判断の間違いがそのまま死につながり、僅かの体力の衰えがすぐ飢えをもたらします。

私達は常に小さな間違いをしています。それは仕方のないことです。しかし、多くの場合それらの間違いはどこかで、あるいは誰かによって修復されます。そのため、幸せなことにヒトでは失敗がすぐに致命的結果をもたらしません。勿論これはヒトの社会（上に述べた学生 - 社会の社会ではなく、総てのヒトを含む社会の事です）の特徴の一つです。

実は、このことは非常に重要な意味を持っています。即ち、もう一度やり直しが出来るということです。小さな間違いで生命が断たれるのであれば、その個体（ヒトの場合は個人とよびます）の失敗の原因を、あるいは対処の仕方のまずさを顧みて、次に生かすことが出来ないでしょう。一般的に、野性の動物は個体の経験が全体に受け渡されることは非常に少ないのです。

逆に言えば、我々はある経験を次の場面で生かすことが出来るのです。この能力を得たことが、ヒト社会が発展してきた力の一つだと考えられます。「ヒトは懲りない動物である」というのは、本来的には誤った考えです。しかしながら、少々の失敗が致命的でない社会が一旦出来てしまうと、この長所は忘れられがちになります。むしろ、それが社会を甘くみがちにし、本当に懲りないヒトが出てくるのでしょうか。

私自身も、常に反省して次の道を修正しているわけでないで、決して大きなことは言えません。しかしながら、上に述べたことは十分に認識しているつもりです。

卒業生への「はなむけの」言葉が、妙な話になりました。しかし、学生であろうと卒業していわゆる社会人になろうと、先に述べたはなしは変わりません。その点をよく理解していただければ、一本筋の通った生き方を持つことが出来るのではないのでしょうか。

## 卒業生へのはなむけの言葉

工学部長 作道 栄一



工学部学部生および大学院生の皆さん、長い間の螢雪の功がいまここに成りめでたく卒業、修了の日を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。この日を迎えて、父兄の方々にもさぞかし安堵され慶祝されていることと思います。将来に向けて期待されて

いることもまた大なるものがあると思います。さて、皆さんはいままでの研鑽によって多くの知識とそれを活かす特技を修得しました。いまそれを持ってそれぞれ社会の発展に寄与して行くこととなりますが、私達はそれに思いを致すとき甚だ心強いものを感じます。しかし、ここで考えなければならないことは、父兄の方々を含めて私達としては単に祝福することのみにその真意があるわけではありません。社会人の第一歩としての足跡を印するという点にあるのです。私達の目は皆さんの将来に向けられているのです。昨今の新聞にもみられるように、近年の大学進学率は非常に高く、今年が高卒生の68%に達したということです。云うまでもないことながら、いまや大学卒には稀少価値がありません。毎年今頃の時期には何十万人の大卒生が社会へ向けてのスタートラインに着きます。将来に向けて希望に燃えているものも、また何らかの目的志向を有しているものも、さらにそれらを何も持っていないものも、総て一同、同時にスタートすることになります。各所で行なわれる卒業式の情景は云ってみれば一つの時の風物でもあります。これら多数の人々のうち、目的に達するものはどれだけの人数になるでしょうか。また満足に燃え尽きることのできるものはどれだけいるでしょうか。この情景をみると、私はつぎの事に思いを馳せます。

人間の能力には余り差がないことを考え併せるとき(長年の仕事を通じて、そのように理解しています。)

上述の息の長いレースで入賞を果たすためには、何と云ってもはっきりした目的意識を持つ必要があるということです。そして、その目的達成のためには創意工夫と不断の努力が必須要件となると思います。一般的に云って、私達人間はその体験から得た社会観を社会全般に善意をもって普及するために努力し、それを生甲斐とするのを通性とするものです。マラソン競技のスタートは参加者の総てが一線に並ぶことはできません。ある程度の縦深を以って開始することは皆さんがよく知っている通りです。それは、これから辿る長い道程に比べて多少の巨離の差は関係がないからです。人生行路においても同様で、ゴールに到着する時の順位の決定要因からは出発時の時間的な差は除かれます。よく学歴等が一つの大きい要素であると云われていますが、長い目でみると結局は大きい意味を持たなくなつて了うことは間違いありません。今後はとくにその傾向にあります。それよりも上述の必須要件がその人の到達すべき位置に対して大きく影響するという事です。個人々々の性格に対応したそれぞれの方法の差異が無視できない要因であることは勿論ですが、それにもまして、上述の必須要件が決定的であることを心に留めて置く必要があるでしょう。人生において、自己の社会観を活かす最も効率的な方法かと思えます。祝福すべき時に老婆心とは云え苦言を呈するような恰好になりましたが、よろしく先輩からの言葉としてその真意を付度願います。多謝。

春秋に富む学部生、院生の皆さんは、今後いろいろな事に遭遇することになりますが、そのためにも健康専一を心がけるべきです。そして長い道程を倦むことなく着実に進まれんことを祈念して止みません。そして、皆さんが今までかかわってきた工学部キャンパスの四季のたたずまい、卒業研究のさいの種々のエピソードあるいは教官の事どもを心の故郷として思い描き、去就に迷うときの支えとされんことを願って筆を擱きます。



## ●●●●● F君の卒業に寄せて ●●●●●

経営短期大学部主事 武 暢 夫



御承知のように、富山大学経営短期大学部は（以下、短大と略称）、経済学部の昼夜開講制への改組に伴って廃止されることになり、昨年3月10日には、いち早く閉学式を行って最後を飾りました。そして、この月25日には、殆どの学生が卒業しましたが、

まだ数名の学生が残留しています。したがって、これらの学生諸君の在学期限が切れる1991年3月までは、在学生の存在する限り、短大もなお名目的に存続することになります。こうしたことは、学部の改組・新設等によって新組織に移行する過渡期にはありがたいことであり、富山大学でも文理学部の廃止と人文学部・理学部の新設、富山医科薬科大学の新設と薬学部の廃止の際に、もとの学部に残留する学生がでてきました。

これらの学生諸君は、それぞれ困難な事情をもっていただのでしょうか。実際、私の知っている卒業生の中にも、苦しい状況におかれながら、教職員や友人たちの温い励ましを受け、期限ぎりぎりまで頑張って、卒業していった人がいます。そのときは、普通の卒業を祝うのとはまた別の感慨がありました。おそらく、本人も同じ思いであったでしょう。短大に残った学生諸君もこうあってほしいと思うのであり、われわれ短大関係者は、これらの学生諸君のために、できるだけ便宜をはかって、全員が一日も早く卒業の条件を整えてくれることを切望しています。とはいえ、残された人の身になってみれば、学友に取り残された寂しさと焦燥に、萎えるような気持ちになり、今さら短大の卒業証書が何かと思うようなこともあるでしょう。それでも、ここは一つ気力を振り起して、最後の頑張りをみせてもらいたいのでもあります。

最近、大学に対する批判が盛んであり、入りに難く、出るに易い日本の大学の卒業証書などは余り意味がないというような声もよく耳にするのですが、少なくとも、大学の教職員や学生がそういうことをいうには

賛成できません。そういうことなら、高い授業料など払わずに、独学で成果をあげればよいのであり、入学後に改めて自分に特別な才能があることを発見し、大学がつまらなくなったのなら、場所を変えて、その才能を磨けばよいのです。しかし、実際には、そのように事がうまく運んだ例は余りないようです。こんなことをいわなくても、殆どの学生は、勉学の程度に差はあれ、卒業していきます。そして、普通の学生にとっては、卒業するだけのことなら、大した困難はないでしょう。しかし、短大の場合は事情が異なり、働きながら学ぶ努力を何年間も続けるのは苦しいことでしょうが、特に、短大の学生諸君には、卒業によって、折角の努力にけじめをつけてもらいたいと思うのであります。

たいへん前置きが長くなりましたが、余り内容のない文章が多いのは、むしろ普通の挨拶の常というものでしょう。幸いにして、今年は1人の卒業生を送り出すことができます。これは貴重な卒業であります。本名を出されるのは本人も照れ臭いことであろうから（私ならそうです）、仮に、F君としておきましょう。指導教官の言によれば、F君は向学心に燃えた好青年であるとのことですが、必ずしもお世辞ではないようです。F君の卒業が遅れたのには、やむをえない事情があったのですが、遅れたからこそ、今回の卒業は大きな意味があるといえるでしょう。それは、さまざまのプレッシャーにたえて、やるべきことをやったということであり、卒業証書はそのあかしであります。F君は、昨年卒業した学友諸君には1年の遅れをとったけれども、この経験は、求めても、えがたいものであり、これからの人生で少々苦しいことがあっても、心の一つの支えともなることでしょう。

蛇足ながら、短大の分身ともいべき経済学部夜間主コースでは、大学・短期大学卒業生等を対象に3年次への特別編入学が実施される目途がつかしました。F君は今回の卒業によって、さらに勉学の意志があれば、新たな挑戦の資格をも獲得したのであります。

F君の卒業を心から祝福し、同君のいっそうの健闘を期待するものであります。



## 昭和63年度定年退職者



|      |      |    |      |      |      |    |      |
|------|------|----|------|------|------|----|------|
| 人文学部 | 文部教官 | 教授 | 富川盛道 | 経済学部 | 文部教官 | 教授 | 瀧好英  |
| 教育学部 | 〃    | 〃  | 泉敏郎  | 〃    | 〃    | 〃  | 山崎佳夫 |
| 〃    | 〃    | 〃  | 林良重  | 教養部  | 〃    | 〃  | 小林浩一 |
| 〃    | 〃    | 〃  | 志波和子 |      |      |    |      |

## —— 富山大学での3年 ——

人文学部教授 富川盛道



1986年の4月に、人文学部の文化人類学研究室に赴任してから、またたくまに3年がすぎたような感じがする。わたしのばあいは、前回2回にわたって、かなり長期のアフリカ調査に出張もし、また、持病のために、メディカル・コントロールにしばられるこ

ともあったから、わたしの富山ぐらしは、もっと、みじかかったという実感がある。それでも、その間、有意義な経験をあたえられ、研究室の生活をたのしむことができたのは、人文学部教授会の寛容と、同僚の赤阪先生や院生・学生諸君の協力のおかげで、心から感謝したい。

富山周辺の町や村の民俗生活の動態は、人類学徒の関心をひきつけてやまないものがある。わたしはツングース民族誌やアフリカ民族誌等を講じはしたが、地もとに、自分のあたらしいフィールドを開拓する余力がなかったのは、残念である。しかし、院生・学生たちの調査発表に接するたびに刺激され、わたしの世界はひろくなった。富山にこなければ、えられなかった、たのしみのひとつである。ことしの秋、あたらしい調査実習に、学生たちに同行して、かつての立山信仰の宿切集落、芦峯寺をかいま見る機会があったが、実際に足をはこんで味わう景観は格別で、これまでもっと、調査実習に同行すればよかったのにと、おもったことである。

この二月中旬のある朝、研究室の窓から、ユリノキにふりかかる粉雪をながめた。このまま積雪になればとおもったが、駄目だった。この三年のあいだ、富山の雪らしい雪を見たことがない。旧制中学のころ手にした「北越雪譜」の豪雪ほどではないにしても、大雪

は、富山のイメージにつながるものだった。わたしの持病は心臓で、富山の雪のくらしは、ひどく警戒して、スキーなどはとんでもないこととあきらめても、他方では、その雪のくらしに心をひかれてきた。このまま、春になってしまうのだったら、いつかの機会に、雪の芦峯寺を再訪してみたい、などどおもったりする。実際には、雪がすくなかったことで、わたしのからだも、五福5区の一隅での、ながくはなかった、ひとりぐらしも、たすけられた。感謝すべきである。

だれもがいうことだろうが、富山の水と魚はうまかった。大学正門まえの近所に、イキのいい魚を売る店があった。ぶらさげてかえって、鍋をたのしんだ。ところが、この夏ごろから店がなくなり、魚の地方名について講釈してくれた親父さんにも、会えなくなったのは、ガッカリした。ほかにも珍重すべき店はいくつかあるが、そのひとつに、一見、文房具屋風だが、専門店でなく、文房具のほかに、こまごました日常品を売っている雑貨屋があって、大抵のモノはそろうので、スーパー・マーケットでなければならぬということはないから、わたしはよく利用した。銭湯もある。わたしは閉所恐怖の傾向があるので、狭小なユニット・バスをきらって、よくかよった。神通川をこえて、都市の中心街へでかけることは、あまりなかったが、わたしの欲求は、この第一次生活地区であるところの、大学街(?)でほぼ充足した。富山大学のキャンパスとともに、わたしがくらしした五福の町は、わたしにとってわすれがたい。

わたしは、その一隅において、富山の都市生活を経験した。大学の発達に、その周囲の街は、トータルな大学のありかたとして、ふかいつながりがある。

わたしが愛好した店も銭湯も、変化はあっても、調和した形で生きのこってほしい。

ことしの夏になったら、わたしはまた、性こりもな



く、東アフリカのサバンナへでかけたいとねがっている。富山大学三年のあいだの、ささやかな経験と思索

が、いくらかでも、アフリカを見る目に反映してほしいものである。富山大学の発展をいのりしたい。

## ★ 定年退職にあたって ★

教育学部教授 泉 敏 郎



§ 1 電話交換台のこと  
テレビで「電話番号案内」の特集を見た。番号を尋ねる以外にも、いろいろな事を交換嬢に問う人が多く驚かされた。このことから推し量ると、わが富山大学の交換台にも「今日の富山の天気は雨か雪か」「卒業式にはどのような

服を着ていけばよいだろうか」等々の、父兄からの電話が数多く寄せられているのではないだろうか。

近頃は「テレフォン・サービス」が普及し、気軽に電話をかける風潮があるため、何くれとなく交換台に聞くのだろう。電話では顔が見えないので、「富山大学です」と言われると、交換台であることを忘れて、(例えば「〇〇学部の庶務につないで」などとは言わず)自分の用件を勝手に話し出したりする。交換台もさぞかし困っているものと思う。学生も父兄も一般の方も〈41-1271は交換台である〉ことをぜひ心に銘じてほしいものだ。

私の経験でも、学生に電話をかけた際に、

①こちらが名前を告げているにも拘らず、先方は名前を名乗らない。母親か姉か妹か、はたまた同宿の友人か管理人か、分からないので困ってしまう。

②「呼びにいきます」と言っ、て、「お待ちいただけますか」の一言もないまま受話器を置き、長時間待たされる。

③用件を言うと「待ってください。メモ用紙と鉛筆を取りに行きます」と言う。

④復唱や確認もしてもらえない。

といったことがよくある。交換台の苦勞が偲ばれる。

さて、自宅から東京の会社へ出版のことで電話したところ、「ちょっと切らせていただきます。こちらからかけ直しさせていただきます」との返事。不服な顔をしていると、家内に「いい会社ね。あなたに電話代を払わせない心遣いよ」と言われた。私はこのような

氣くばりをしてきただろうか。恥ずかしく思った。

顧みれば、無用の電話を長々としたことはなかったか。私が切らない限り、相手は受話器を置くことを遠慮していたに違いない。しかも回線はふさがれたままである。二重の迷惑を関係者にかけていたことになる。併せ、正に他人事ではない、と反省した。

或る大学の教官に電話し、不在であった場合に、伝言を頼む先は総務課が適当か、庶務か学務か教室か、と迷うことがある。とすれば、逆に私あての電話で交換台はおそらく大変な苦勞を払ってこられたことであろう。交換台の皆様、40年間本当にお世話になりました。

### § 2 庶務係のこと

会議通知・諸連絡などで一方ならぬお世話になった。庶務係のご尽力なくしては、一日も日をおくることができなかつた、感謝しないではいられない。

### § 3 会計係のこと

昭和25年4月にこの大学に採用されたが、その頃校舎は木造で、暖は火鉢でとっていた。授業中に一酸化炭素中毒で倒れた教官も時々おられた。今日の設備の充実を見ると昔日の感がある。これらは皆、会計の方々のご苦勞の賜物である。部屋やトイレの清掃などもあまり気づかれない事であるが、各位の格別のご配慮によっている。いずれも忘れられない。

### § 4 学務係のこと

成績管理は言うに及ばず、学生の厚生補導、就職指導、休・退学あるいは復学など、特別のご尽力をいただいた。教育機関としての重責は、学務係の方々の支援によって多くは果たされているように思う。

### § 5 富山大学を去るにあたって

正門から学内風景を見る。かつては小さかったハンテン木(ユリノキ)もすばらしく大きくなった。歲月

の蓄積が確かにそこにある。

上記の方々に限らず、お名前も顔も存じ上げない数多くの皆様と学生諸君のおかげで、40年の教師生活をここで送ることができた。喜びと感謝の気持ちで一杯

である。

皆様、本当にありがとうございました。どうぞ御自愛ください。

## 退官にあたって

教育学部教授 林 良重



去る2月14日午後4時から約1時間半、最終講義（公開）をいたしました。

私の講義（演示実験を含む）は、私の工夫したマン談です。マン談はマン談でも、漫才のマンではなく、私のつもりからいいますと、満足の満でして、内容の充実した、張り切っ

た満談です。

私は本学において恐らく何百回か講義をしたと思いますが、しかし実際正直なところ、満談をしたという充実感をもって講義を終えたという経験は実に寥々たるものでして、ほとんどいつも自分は少し準備が足りなかった、あの所は少し失敗をしたとか、何らかの悔恨の念にかられてきました。最終講義もその例外ではありませんでした。

もう四十年以上もやりながら、どうも満足な講義もろくにできないようなことで、まことに恥ずかしい次第です。もう一度やり直さなければいけないということではないかと思えます。

しかし、時すでにおそく、定年退職ということになってしまいました。

富山で生れ、富山で育ち、富山で教職につき、武者

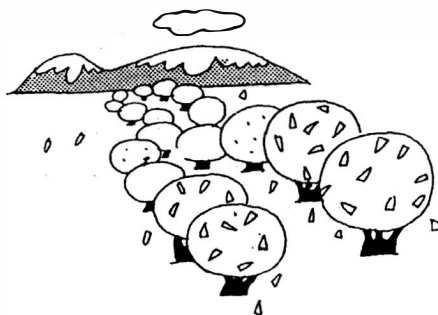
修業のために二十年間富山を離れ、望郷の念にかられ富山大学に來ました私が、また富山を去ることになりました。

「富山大学に北陸の理科教員養成の拠点を創れ」との故玉虫文一先生、柿内覽信先生、八杉龍一先生の激励の声に送られ、多少ドン・キホーテ的な気持ちで決心をしまして、このキャンパスにやって來ましたが、それからもう11年になります。

その間歴代の学長、学部長や同僚諸兄と共に私も微力を尽してまいりましたが、今何事をなし得たかまことにあやしいものであります。しかしその間にいろいろな方々から受けました知遇、恩情というものは身にしみて感じている次第です。つくづく先輩、同僚、それから学生諸君の理解と友情というものを感ぜないではおられません。

また、附属小学校長を三年半も併任し、先輩、同僚、保護者の皆様から受けました知遇、恩情に対し、心から感謝いたしておりますが、何事をなし得たか、これもまことにあやしいものであります。

長い間本当にお世話になりました。ご指導ご支援をいただいた多くの方々に心から感謝いたしますとともに、皆様のますますのご発展とご多幸をお祈り申し上げます。





「今は昔」。卒業・転勤・退職などと、この季節に人は、たびたび送ったり送られたりしてきました。折にふれ時に従って縁あった人々とも、この時を境にサヨナラをする、再び巡り逢うのはいつ、どこでなのか予測できない——そうした時に感じる一抹の淋しさは、別れゆく人との懐かしい様々な思い出と重なることで、次第次第に胸に沁みてくるといったものだったのでしょうか。それはまた、やがて来る自分の退官を予感したものであったのかも知れません。

しかし、現実に「これで終わり」のその日を間近に控えてみると、送られ手の感慨は送り手のものとは些か違うようです。淋しいには違いないのですが、それを包み込む大きな安堵感、ここまで辿りつき得た満足感と解放感が、日が近づくにつれ湧いてくるから不思議です。

富山大学教育学部——この“終の学び舎”には九年半お世話になりました。それ以前は学部附属幼稚園に勤めており、縁あって教育学部に迎えていただいたもので、少し変わったケースでした。幼稚園での教員生活は長く、勤務年数の47分の25、つまり過半数を過ごしたことになります。その幕開けが、昭和27年着任の附属幼稚園教諭。場所は現在、大学本部の在るところ、敗戦の後には「つわもの共の夢の跡」の地と化した、旧連隊「将校集会所」。焼け残ったいかつい建物を利用して開設されていました（因みに附属小学校はそこから少し離れた馬小屋でした）。

今も亭々と聳える銀杏や杉の木の間をめぐり、子ども達と互いに声と心をこだませて遊び暮したものです。現在の理学部近辺、附属図書館辺りもその頃はすべて原っぱで、木造の畜舎がつきあたりに建っていました。子ども達は、緑の草原をわが庭とし、畜舎の兎や放飼いの山羊、繋がれた牛・綿羊なども友として、駆けめぐったのです。その後、幼稚園は何度かの転居を経て、現在の名実相伴う園に至っています。その間、子ども達と共に遊びながら、或る時は充実感に浸り、或る時は自身の保育観が動揺をきたす中で模索を続けており

ました。

大学人となってからは、学生指導のためもあって、過去の保育実践の中により確かな系統性を見出そうと努め、学問の世界を覗き込んで知る喜びを味わうことができました。思索のパッチワーク期とでも申しましょうか、このことを通して自らの足跡を鳥瞰し統合してきたと考えています。思えば、幼稚園在職期には幼い子ども達から、また大学奉職期には幼児教育課程の学生から、若々しさを吸収させてもらっていました。そのはちきれそうなエネルギーをわが活力源としてきたといっても過言ではありません。

昨日の日曜日、夕方近くにふと早春の城址公園を散歩いたしました。桜の芽は、枝と同じ茶褐色をしてはいましたが、それでも鳥の足あと状に小枝の先々につき、僅かな丸みを示して咲く時を待っていました。林の中を歩いていくと辺り一面に20数センチの枯れた棒が落ちています。見上げるとそれはきささげの木でした。ささげを束ねて吊り下げた形の莢果が高く細い梢の先にぶらさがって残っており、番傘の骨のようにも、また茶筌を吊り下げたようにも見えます。するとその時、遥か上空に、音も無く閃光だけが小さく鋭くきらめきました。目を凝らすと、イカの透視を思わせるように機体がかすかに透けて見え、ジェット機でしょうか、それがスーッと去っていきました。残された空には、いつの間にか宵の満月が昇ってきています。誠に大きく、翌日（2月20日）の皆既月食を前にして、ゆったりとした存在感を誇るかのようです。この散歩の間、犬を連れて人に二人出会いました。空気は柔らかく、冷たい中にも春めいたものを感じさせ、かつて「勝地はもとより定まれる主なし。おおむね山は山を愛する人に属（しょく）す。」と人と自然の交流を詠んだ白楽天の、その昔も偲ばれてきます。これから迎える老年期には、そう、散歩のこうした楽しみも一つ待っているのだと、心が弾んできました。また、このように考えること自体も、永い時の流れの中に一シーンとして織り込まれて、私の今昔物語にピリオドが打たれる時を迎えるのか、などと思い、不思議に和んだ気持ちにもなりました。

様々にご迷惑をおかけしたであろうことへのお詫びやら、多くの方々に支えられて今日あることの有難さ

やらを、しみじみと思いながら帰路を辿った初春の散歩なのでした。

— 流れゆく 大根の葉の 早さかな (虚子)

## 退官のご挨拶

経済学部教授 瀧 好英



定年により退職することになりました。本学に着任したのは昭和46年10月でしたから、本学在職期間は17年半ということになります。定年を迎えたにしては勤務年数が短い方かもしれません。

私の場合、国家公務員としての在職期間は43年余りになります

ますが、その大部分を経済企画庁（経済安定本部・経済審議庁から改組）で暮らしてまいりました。経済企画庁では永年勤続の表彰を受けました。同庁の表彰規程では、他の省庁の分も通算して20年以上勤続者について5年ごとに対象とすることになっていました。20年、25年、30年、と副賞の銀盃が少しずつ大きくなっていて、三つ重ねが出来る仕組みになっています。私は、20年と25年の銀盃をいただいてから本学へ出向となりましたので、三つ重ねは完成しないままです。

昭和46年の半ば頃、初めて、富山大学への話を耳にした当座は、不安材料が多く、なかなか決心がつかかねていました。東京都内の国立市にマイホームを建てて10年ほどしかたっておらず、また富山県は、国鉄で通過したこともないほど未知の土地で、予備知識としての情報が全くない、といった事情もありましたが、なんと言っても、永い間行政官として仕事をしてきた者としては、総理府事務官のタイプが出来上ってしまっているところへ、文部教官への転身という問題が降って湧いたように出てきたわけですので、全く先の見通しがつかない、というのが当時の心境だったように思われます。

故新田隆信先生（当時の経済学部長）のお勧めや、

篠原三代平先生初め東京在任の先輩方のアドバイスがあって、とにかく離京とそして教職への転身との決心をいたしました。そうして、実際に新しい任務についてみると、官庁の仕組みと大学の仕組みは全く違うことにまず戸惑いをおぼえました。その違いを理解し受け入れるのにはずいぶん時間がかかったように記憶しています。しかし、3年、5年、10年と過ぎてゆくうちに、大学という職場はもちろん、研究者としての生き方自体も、自分に向いているような気がしてまいりました。そのうえ、富山という土地柄も、私にとっては大変魅力のあるところであるように思えてきました。そうして結局のところは、定年後も富山に落ち着く決心をすることになりました。

以上のようなわけで、国家公務員生活の最後のステップを富山大学で過ごせたことは大変な幸せだったとつくづく感じております。総理府事務官から文部教官への転身には、並々ならぬ苦勞が伴っていましたが、思いっきり頑張って克服しようと思っかけていた時期は、私なりに大変充実した生活を営むことができたと思っています。言うまでもなく、定年退職は国家公務員生活の終息でありますので、私にとっては、在籍年数の圧倒的に多い事務官時代がまず回顧されるはずのように思われます。しかし実際に思い浮ぶのは、ほとんど最終ステップの富山大学における教官（というよりは研究者）としての生活だけなのは不思議でなりません。事務官生活に手を抜いたおぼえは毛頭ありませんが、年をとってからの転身は、やはりこたえたのかもしれない。

経済学部の先生方、事務の方々初め学内の大勢の方々に大変お世話になりました。おかげ様で無事この日を迎えることができましたことは大変有難く、皆様によりお礼申し上げます。





# 定 年 雑 感



経済学部教授 山崎佳夫



わたくしは、昭和29年4月経済学部奉職し、昭和31年4月から講義を行ない、演習(ゼミ)を担当した。以来、わたくしのゼミ出身の卒業生は350名を超えるにいった。彼らは、わたくしの宝であり、誇りそのものでもある。愆深い話ながら、親子二代にわた

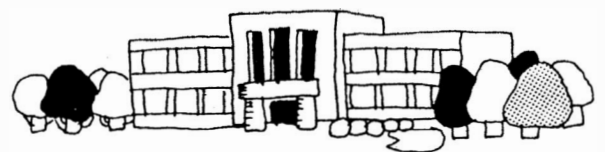
るわたくしのゼミ出身者はいないが、父親が経済学部の卒業生であるというのは二組もある。

いうまでもなく、研究と教育は不可分一体のものである。学問の研究に定年はないと励まされる。それは確かに真理であろう。わたくしも、そのように超然と純粋に生きるべく心掛けたいとも思う。しかし、凡人のわたくしは、むしろ教育の面にアクセントをおきたい。教育には学生の存在を前提とする。学生なくして教育はない。わたくしのもとに学生が来なくなったとき、わたくしは限りない寂しさと空虚を感じるのである。制度的に、学生がわたくしを顧みなくなったとき

が、正にわたくしの定年である。わたくしは、定年をこのように解したい。

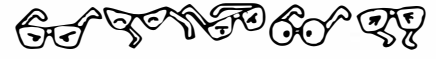
さる1月26日には、経営学科で、わたくしの最終講義(la dernière classe)をしつらえて頂き、301番教室は満席であった。論題には、「わが国商法における計算思考の変遷」を選ばせてもらった。またきたる5月7日には、ゼミ出身者がわたくし達夫婦を招待して、退官を記念した行事を催す予定である。いずれも、わたくしに「有終の美(有終完美)」を飾ってやりたいという厚い好意からきたものである。有難い極みである。

わたくしの学生時代(大学予科)に習った英語の教科書のなかで、James Hilton 著の“GOOD-BYE, MR. CHIPS”というのが印象的であった。そこにはChips先生の40年有余にわたる教師生活が叙述されている。わたくしの教師生活は、内容的にはとてもChips先生におよばないが、形の上で、学生側からすれば、“Good-by, Mr. Yamazaki”となり、わたくしの側からすれば、“Good-by my Boys and Girls”となる。わたくしは、感謝と感激をもって富山大学を去る。“ADIEU, TOMIDAI!”





## 退官に際して



教養部教授 小林 浩一



5年間の富山大学の生活が夢のようである。

ここに来る前にいた大学では、定年が近づくとつれ、その後の人生をどのように過ごしたらいいかを考えることが多くなった。当時、私は物理学の研究をおこなう附置研究所に勤務し、狭い分野の興味で

うごいていたので、いつの日にか、物理学を広く見渡す機会があれば、と漠然と考えていたが、定年を機会に、その後の一時期を一般教育の教師として過すことにより、この願いを満すことができれば、と思うようになった。それと、子供の頃から山歩きが好きで、その後もずっと続けていたので、いちどは、高い山々を身近に望み、気がむけばいつでもそれに歩み入ることができる所に住んでみたいと望んでいた。幸い、本学の教養部に来ることができたのは、何ととっても好運であった。

私の専門は、固体電子論を基にした、物資の光学的電気的性質の実験研究であるが、ここに来、一般物理の講義の準備をはじめてみて、予想していたこととはいいながら、自分の知識が粗雑で断片的なものであることを思い知らされた。今迄やって来たことが、物理学の体系全体のほんの一部であったからである。自然科学は実証の学問で、昨今は、実験家は特定の問題をもって、大型装置を動かし、いつも体をうごかして忙しく走り廻っていなければならぬ、というような風潮がある。しかし、物理学が学問であるからには、思考による知的な抽象化の作業なくしてはなりたらず、これを行う期間が必要で、これと現象の体験とが交互にあって、はじめて進展があると思われる。このような意味で、静かな雰囲気の中に、物理学を学問として考えなおす機会の多かった富山の5年間は、私にとって大きな収穫であった。

山歩きについていえば、光に満ちた初夏の剣、立山、葉師の周辺、紅と緑をちりばめた秋の黒部川流域、飛騨、美濃へとつづく冬から春にかけての雪の山々などを堪能し、富山に住んではじめて得られる、充実した日々を送ることができた。当地に来た甲斐があったというものである。

富山大学に対して私がしたことといえば、学生に物

理学を講じたくらいで、他にあまり役立つことがなかったのではないかと、申訳なく思っている。したがって、去るにあたり云々する資格は無いようにも思うが、敢て一言つけ加えさせてもらいたい。

富山大学が今後もかかえる問題として、キャンパスの乱雑さがあるかと思う。これが自動車の駐車に深く関連していることは、誰も感ずるところであろう。しかし、これは表面にあらわれた現象であり、その底には、大学のキャンパスがどうあるべきかという、基本理念が希薄であったことがあるのではなからうか。これが原因となり、今の様な状態にずるずるとなってしまったように思えてならないのである。

キャンパスは学生と教職員が学問し生活する場であり、これに必要な空間を予じめ確保した上で、残りの部分を他の使用に供すべきだと思っている。具体的には、外国の多くの大学に見られるように、人々が三々五々と歩行し、休憩し、会話する屋外の可成りの面積の場所が、キャンパスの中心に必要であり、まずこれに優先的な配慮をすべきであろう。現在、この条件を満す空間は、正門から図書館にかけてのメインストリートが唯一のもので、もし、ここから自動車は勿論のこと、視覚や聴覚にとってどぎつく騒々しい一切のものをも排除し、これを庭園式の広場に変え、新黒田講堂とも連結させることができれば、キャンパスの様相は一変し、あたかも自動車のジャンクヤードのような中に校舎が散在し、学生の憩う場所が屋外に無い現在のキャンパスが、大学にふさわしいものになるのではないかとと思われる。自動車は、キャンパスの周囲を回遊するようにもうけられた一方通行の自動車道を使って通行し、自動車による建物へのアクセスは、すべて裏側から行うようにできないものであろうか。駐車台数は今より少しは減少するかも知れぬが、大学キャンパスが本来の姿をとりもどす為に、我慢する価値は充分にあると思うのである。

いずれにせよ、この5年間の生活は、私の学問にとっても、又、生活にとっても、稔りあるものであり、人生の一時期を、このように過させて戴いた大学当局、同僚の方々、又講義に出てくれた学生の諸君に、感謝の意を表したい。深い愛着をもつ富山大学の今後の発展を祈るや切なるものがある。

# 新任教官紹介

・西村克彦 助手(理学部) 63.11.1  
昭56.8 新潟大学大学院理学研究科修士課程退学  
担当: 固体物理学

## 新任の御挨拶

理学部助手 西村克彦



昨年11月1日より、理学部物理学科固体物理学講座の助手となりました。よろしくお願ひ申し上げます。

私は、学生時代を含め12年余りを隣の新潟県で過ごしなが、今回初めて当地を訪れました。浅慮な印象を述べさせていただきますと、まず路面電

車が運行しているのを見て嬉しく思いました。私の家族もこの電車を気に入り、現在南富山駅から徒歩2分のアパートに住みながら、おおいに利用しております。街の中心にお城があるため、街全体に落ち着きがあるように思われます。更に、三千米級の立山連峰が間近に控え、その雄大な姿に感激致しました。呉羽山から見る立山もいいですが、私は富山大橋から見る立山が

好きです。私の講座の佐藤教授は、月岡の自宅から見る立山が最高だとおっしゃっておられます。

本学では、磁性を中心とした固体物理学の研究を進めていくつもりです。以前は原子核物理の実験を行っており、学位もその分野の研究で取得致しました。そのため研究内容が多少変り不慣れな点もあり講座の先生方に御迷惑をおかけしております。しかし、最近様々な分野のアイデアを融合的に活用しようとする試みがさかんです。ですから研究分野を変えることは必ずしもマイナスとはならず、私にとってこの変更がプラスとなるように努めてまいりたいと思います。私の周りの大学院生が自主的に研究を進めている様子を見て勇気付けられております。

今後も微力ながら本学における責務を果して参りたいと存じますので、諸先生ならびに事務官の皆様の御指導をお願い申し上げます。





1981年にアメリカに渡り、PDF（ポストドク）としてスタンフォード大学に1年と4カ月滞在した。私の専攻は地球科学の中の岩石学という分野で、地殻の深部で起きている鉱物間の化学反応を調べるという学問である。私の研究テーマは予め向こうの研究

グループによって決められ、幾つかの鉱物と共存する溶液中のAlの溶解度を測定して、鉱物相平衡を議論することになっていた。向こうに到着して実験の原理を調べてみると、この実験が労多くして殆ど意味のないことを悟った私は、返事だけ“OK”ということで、結局その実験については何もしなかった。代わって、当時すぐに解かれるべきもっと重要な実験の幾つかを、昼夜問わず実験しているうちにあっという間に1年と4カ月が過ぎてしまった。実験の合間は論文書きとNSFプロポーザル書きの連続で大変な日々であった。

1982年以降、毎年3～4カ月をスタンフォード大学で過ごし、私自身の研究の続き、大学院生の研究指導、USA・中国共同研究、論文及び専門書の執筆という作業を繰り返し既に7年が経過した。この間にアメリカ大統領はカーターからレーガンを経てブッシュへと代わり、それと共にアメリカ経済は次第に悪くなり、それは如実に科学研究費採択率の低下へと反映されてきた。

初めてスタンフォードへ渡った時、私は大変なカルチャーショックを受け、また英会話が殆ど理解できないというハンデにさいなまれ大変な毎日の連続であった。相手の英語の質問をまず日本語に翻訳し理解した上で今度は返答をまず日本語で考え次に英語に翻訳して発音するという具合であったから、一日が終ると異常なくらい頭が疲れ、ベッドの中で本当に泥のようになって眠った。何カ月過ぎても一向に英語は上達しないので、ある時ついに、見切りをつけて、“私は英会話の勉強にきたのではなく、研究に来たのであって、論文を読み書き出来ればそれで英語は十分なのだ、それ以上のことは不必要ではないか”と自分に言い聞かせ、自己満足することにして自分の研究に没頭した。

そうすると不思議なくらい気分が楽になり、実験も含めて全てのことが順調に進んだ。

今思い起こすと、私はこの頃のこんな経験を通して、“集中力”というものが研究にとってどれだけ大切かということ学んだと思う。この頃は、24時間ずっと研究のことだけを考えて過ごすことが出来た。突然何かを思い付くとメモする習慣を持つようになり、どうしても解けない問題が夢にまで現れたり、夢の中で何かを思い付くと反射的に目が覚めてメモをつけるという習慣が身についた。

こういう生活をずっと続けてきたために私はスタンフォード大学をすみずみまで散歩したり、この大学の歴史や歴代学長について研究するという時間を持つことができなかった。だから以下にはほんの概要を紹介することしかできない。

スタンフォード大学は広大なキャンパスの中にスペイン風の建築様式に統一された研究施設が美観を損ねないように立ち並び、アメリカ国内の大学の中でもひととき違った外観を呈している。創立者のスタンフォード卿は西海岸のゴールドラッシュの時に金の売買で得た資金を基に鉄道王へと駆け上がり巨万の富を得た人である。典型的なアメリカンドリーム的人物の一人であるが、子供に恵まれず、年老いてからやっと得られた一人息子は大学に入学する年頃になった時に腸チフスにかかり死亡するという悲劇にみまわれた。この事件がきっかけになって彼は莫大な全財産をつぎ込んで、息子の大学という意味で“スタンフォードレランドジュニア大学”を設立したのがスタンフォード大学の始まりである。大学のもつ財産は創立当時全米でも1、2を争うくらいであったというが、大学自体のレベルは全米の中でまん中ぐらいであった。その大学をここ数年間、全米ランキング第一位（アメリカは面白い国で学識経験者を対象にして学問と教育の充実度をアンケート調査し、ランキングが毎年一回発表される）をずっと維持するまでに押し上げた功績は工学部のターマン博士にある。彼は、日本では大学紛争が始まり産学共同がやりだまに挙げられていた頃、大学の周りにシリコンバレーと今日では呼ばれる企業地域を、徹底した産学共同体制で作り上げた。スタンフォード大が研究し、周囲の企業はその成果を産業に応用し、得た利



潤を企業は大学に投資するという仕組みで大学も企業も潤った。ターマン学長はこうした努力で、数人の教授を雇える資金のめどがたった時に、ずば抜けた才能をもつ教授を一人しか雇わないかわりに、彼に他の大学の数倍の給料を支払った。

彼は、学問はごく少数の優れた研究者のもとで進められ、その研究者（タワー）の周りには優れた学生や

共同研究者が必然的に集まることをよく知っていたと思われる。大学を経営する側ではそのタワーを作り、維持することがもっとも優先されるべきことなのである。スタンフォード大学のサクセス・ストーリーは日本の地方大学が学ぶべき何かを語っていると思うのは私だけではないだろう。

## 小国ベルギーとヨーロッパ合衆国

理学部教授 松浦郁也



ベルギーはヨーロッパ北西部に位置した人口約900万の何の変哲もない小国としてしか知られておらず、日本の若い旅行者が訪れる所と言えば首都ブリュッセルにある小便小僧やナポレオンが最後の戦いを挑んだワーテルローの古

戦場やフランダースの犬の小説にでてくる主人公パトラッシュが住んでいたとされるアントワープの近くの村ぐらいのものでしょう。しかし中世に毛織物業や貿易で栄えたブリューージュ、ゲント、ルーバンなどの町は中世そのままの姿で今でもたたずんでいます。またフランドル派として有名な中世の画家ファン・アイク兄弟、メムリング、ブリューゲルらや巨匠ルーベンスの絵画にふれる事が出来るのはベルギーしかありません。

ヨーロッパの殆どの国は母国語を持っていますがベルギーは母国語を持たない国の一つでありオランダ語を話すフラマン地方とフランス語を話すワロン地方が存在し、町にはオランダ語とフランス語のふたとおりの呼び名がありハイウェイの標識は交替でオランダ語名とフランス語名が示され、初めてベルギーをドライブする者にとってははなはだ迷惑な表示です。また政治にかかわる閣僚の中で文部大臣と文化大臣はそれぞれの語圏から選ばれて二人ずついるという極めて奇妙な国でもあります。

ベルギーのルーバン市にあるカソリック大学は創立1425年と言う世界で最も古い大学の一つですが、1968年までこの大学の中にはフラマン系とワロン系の2つのコースがありオランダ語とフランス語で講義が出来

なければ教授にはなれないと言うルールがありました。その後この大学は二つの大学に分離しワロン系は新しい土地に移転しました。私は富山大学に赴任する6年前までこのワロン系のルーバン・カソリック大学に奉職していましたが、昨年10月に招へい教授としてふたたび訪問し3ヶ月間滞在しました。6年ぶりに訪れた大学でしたが、大学を囲む町並みは6年前そのままの時の流れを感じさせるものではありませんでした。変化したものといえば大学構内にまで引き込まれた駅舎の壁がデルポーの特異な裸婦のコピーで覆われていたこと（ベルギーの画家デルポーの素晴らしい裸婦画は富山の近代美術館にかざられています）また学生会館の白かった壁がサイケデックなキリストの絵で大きく塗りあげられているぐらいでした。しかし大学構内に入ると、そこには6年前と違った雰囲気だけがただよっている事に気づきました。このルーバン・カソリック大学には約1万8千人の学生が学んでいますが、そのうち約3千人は留学生という国際的な大学ではありますが全く英語の通じない大学でした。ところが今回の訪問では英語の通じる留学生が多くいることに驚かされました。私はわずか数年の間にこのような変化がどうして起こったのかよくわかりませんでした。

1957年ヨーロッパの6ヶ国で欧州共同体（EC）をつくりブリュッセルにEC本部をおいてから30年以上たち、現在ではECは12ヶ国に増え総人口も3億2千万人として1992年末にはECを統合してヨーロッパ合衆国を発足させようとしている事は良く知られていますが、今回ベルギーに滞在してEC各国の消費税の調整が行われつつある事、国境に配置されている税官吏の首切り反対のデモなどの報道によってEC統合が

確実に進行している事を感じると共に大学の中にもEC統合の新しい波がおしよせて来ている事を知りました。

私が大学の中で感じた新しい息ぶきは大学がベルギーという小国の枠の中ではなくヨーロッパ合衆国の中の大学として出発点にたっていると言う意気込みであったのかも知れません。ヨーロッパが統合された時に教育の場で行おうとされているプログラムには次の3つのプログラムがあるようです。その1つはYESで示される若い学生がヨーロッパ合衆国のどの国の学校へ行っても奨学金が与えられるという制度です。2つめはERASMUSと呼ばれる大学の学生の交換制度で大学が最も力を入れて取り組んでいる課題のようです。3番目はCOMETTで示される大学院生または大学研究者らの研究交流を行う制度です。すでにこのCOMETTプログラムはEC最先端技術共同開発機構の中でEC共同体として幾つかのプロジェクトが組み立てられて研究が進められていました。

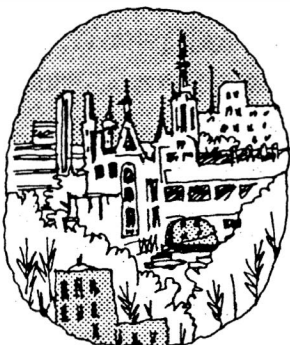
ベルギーではオランダ語とフランス語の二つが国語として使用されていますが12ヶ国からなるヨーロッパ合衆国が発足した時には英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、オランダ語、デンマーク語、ギリシャ語と9つの言語が使われることになり、この言葉の問題を解決する方法として子供たちにどのようにして少なくとも2ヶ国語が理解出来るように教育するかについて真剣に研究が行われてい

ました。とくに英国は英語をヨーロッパ合衆国の共通語としようと考えているようで、英語の発音をよりフラットにし誰にでも聞き取れる話し方に変えようとしていますし、rとlにもこだわらずに字がつづれる方法を考えているようです。ある雑誌に載った奇妙な21世紀に書かれるであろうとされている英文を載せておきましょう。

Bondag ! My name is Jacques Gonzalez van Smith. I was boln in 1992 and wirr be 45 next yeal. I am a citizen the USE. The United States of Eoulope, that is. In convelsation it is often mistaken for the USA. But ranguage and rife are so intelnational it doesn't matter too much. Zo what? It's this lacial mix that make us multinational Eulopians what we are the most mixed-up people on and off Ealth.

(Holland Herald から引用)

ヨーロッパは今一つの合衆国になろうとしています。この統合によってGNPにおいて日本を追い抜き世界第2位の位置に占め、さらに将来はアメリカをも抜いて世界第1位の座を狙っているようです。私はこのヨーロッパ統合が日本の締め出しとはならず今までと同じように開かれた自由かつつなヨーロッパ合衆国となる事を希望し、その時ふたたびベルギーを訪問したいと考えています。





## 家畜になった日本人



理学部教授 鳴橋直弘

文部省の昭和63年度海外学術研究で、ネパールに行く機会がありました。この調査旅行は、木材の構造の解析を中心に、日本からヒマラヤに至る地域の植物の系統関係を追求することを目的としています。

ネパールといえば、8,000m級の山々が連なるヒマラヤ山脈を思い浮かべるかたが多いかと思いますが、私が行った6月末から9月末にかけては、あちらでは雨季にあたり、1日に1回は雨が降るような天気続き、3カ月にわたる旅行中、山が見えたのはたったの4日だけでした。もっとも日本とは違って、もともと高地にある国なので、山といえば7~8,000m級のを指し、それより低いものは、もっぱら丘と呼んでいました。昨年は特に雨が多い年であったようで、下流にあたるバングラデッシュから大洪水のニュースが流れて来ていました。

そんな天気の中を、3回の調査旅行に出かけました。初めの旅行は東部地方で39日、次に中央部へ24日、最後にカトマンズの北へ3日間です。いずれもホテルも旅館もない山間部の調査ですから、食料や資材を担いでのテント生活です。こういった山地でのトレッキングは、期間も長く、道にも不案内なので、普通現地でガイドとポーターを雇います。我々の隊は、ネパール人1人を含む隊員8人、それに現地で雇ったコック、シェルパ、ポーターなどで、総勢50人ほどの大所帯になりました。我々の移動は、インド平原をバスで走った以外、徒歩のみです。

ポーターは、30kg近い荷を背負って、朝の7時頃に出発、途中10時頃に、朝と昼を兼ねた食事のために止まるだけで、山道を5~6時間も歩き続けます。彼らの中に腹具合が悪い者がいたり、登りばかりで調査も採集もあまりできないようなところでは、我々の方がポーター達を追い抜いてしまうこともありました。普通はポーターが先にテント場に到着して、テントを張り、我々の到着を待っています。

シェルパは、隊員1人1人別行動出来るように、隊員1人に1人つきます。彼らは、道案内はもちろんのこと、我々の生態調査や採集の手助けをしてくれます。そのために、隊員の弁当、大きなサーモス、カメラの三脚、雨ガッパ、傘、および、人によっては大きい釣り竿と鎌、標本を入れるビン、アルコールやホルマリ

ン、植物をはさむための古新聞などの入った大きいリュックをしょっています。

我々はといえば、記録ノートやカメラ類と日用品や貴重品を身に付けているだけで、ほとんど空身のようなものです。それにもかかわらず、歩き出して15日目、約4,000mのシプトン峠を越えるところ、若手の隊員3人が体調を崩しました。日本にはない高さのことゆえ、高山病の頭痛や睡魔に悩まされていることもありましたが、それ以上に日本人にはこうした環境に生きるための基礎的な体力が欠けているような印象を受けました。「最近の日本人は車社会のおかげで足腰が弱くなっているのです。」と言いつくと、シェルパの1人が、「日本人がテレビの取材に来たときに、小野田という相当年をとった人がいたが、彼は山でも強かった。」と言いました。小野田さんは、フィリピンで何年もジャングル生活を経験しているので「彼は特別だ」と答えておきました。

ポーターの一部のほかは、みんなテントで眠ります。テントのないポーター達はテント場近くの民家に泊まっているようでした。だんだんと高地へ登って行き、最後の部落も過ぎて深い山に入ると、岩場の雨のしのげる所で寝ているらしく、ステイといって移動しない日には、遠く離れた山腹の岩場の炊事の煙が目に入ります。我々なら寒さと石の痛さで到底寝てはられないところで寝ていましたし、1人しか寝られないような狭い所でも2、3人でくっつき合って寝ます。

山での炊事は民家で買った薪を使いますが、人家の無い高い所では、生の材木を切って薪とします。かまどは石3つぐらいで作ります。時として薪の上に直接鍋をおくこともあります。これが意外と倒れないのです。雨季ですから、薪はかならずしも乾いているとは限りませんし、テントの外は雨が降っているのですから、私だったら炊事に泣かされることしばしばだったろうと思います。彼らは、素手で燃えている木やおきをつかむことを平気でします。いくら手の皮が厚いといっても、熱くないのかといまだに私には不思議です。

4,600mのマカルーベースキャンプの前を流れる川は、氷河のとけたもので、3℃と冷たく、流れも早いのですがカルカ人（夏の間ヤクやヤギなどの動物を放牧し

高山で生活する人達)は素足でその中を渡ります。その辺りのカルカの子供達も裸足であり、我々には到底冷たくて辛抱出来そうにありません。

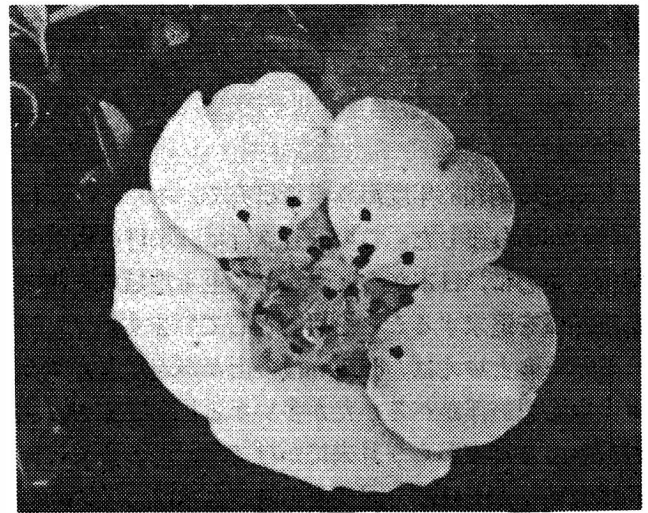
帰国後に、ネパールの人達と日本の登山家が富士山に登ったという記事を読みました。日本人登山家はその早さに7, 8合目からついて行けなかったそうです。

彼らは頑健であるというばかりでなく、生活の知恵も相当であることを実感しました。寝袋を濡らさないように大きな厚手のナイロン袋に入れて運んでいます。それがトラंकとかちあって穴が空くのです。そんなとき我々は新しいのと取り替えるのですが、彼らはライターでその穴を器用にふさぐのです。また、蓋を石でうまく変形した鍋を使ってケーキを焼いたりします。

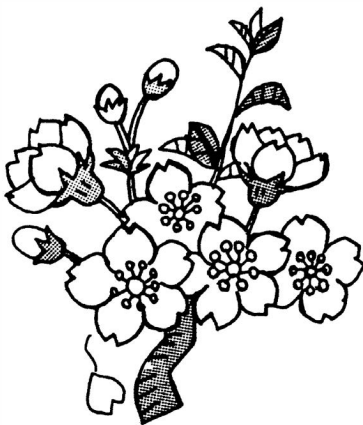
隊員同志の間では、シェルパ達は我々の期待していることをすぐに悟ってくれるが、今の日本の大学院生は教えても理解してくれない、などという意見もささやかれていました。

人間の保護の下で生活している家畜のように、現代の日本人は、電気、ガス、水道などの文明のない所では、生活できないかもしれません。

私はまだ読んでいないのですが、今野道勝氏が「家畜になった日本人」という本を書いたそうです。今回のネパール調査で、まだ読んでいないその本の内容が、少しわかったような気がします。つまり、日本人は体格だけは立派になっても、体力は小柄で細身のネパール人に劣るということでしょうか。



[写真は、4,300mに生育しているキジムシロの1種の花で、同じ花を上は可視光線のみ、下は紫外線のみで撮影したものです。





## —— 疲労とセラミックス被覆 ——

工学部教授 塩澤和章



昭和60年8月12日夕方、羽田空港を離陸した日本航空123便のボーイング747SR型ジャンボジェット旅客機が大阪空港に向かう途中、群馬県上野村の御巣鷹山に墜落した。4人が奇跡的に助かったものの520人が死亡し、航空機1機の事故としては空前の大惨事

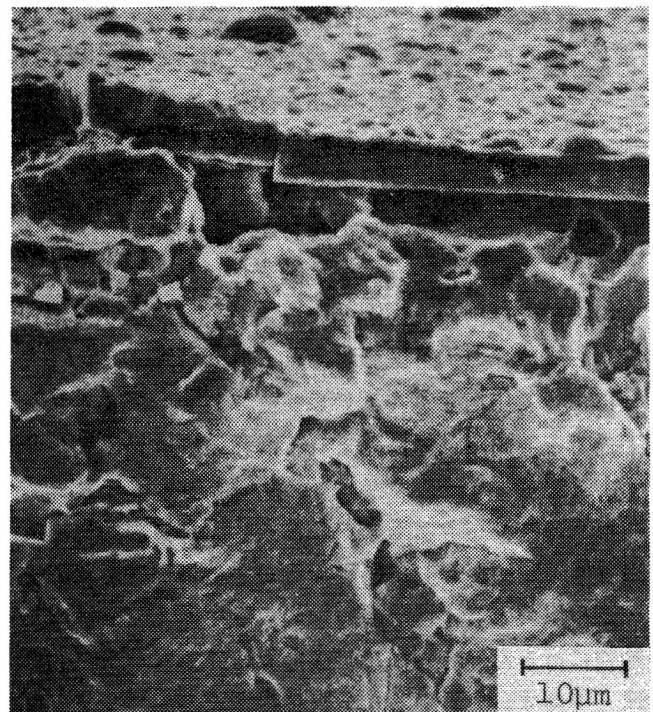
となったことは記憶に留めている人も多であろう。事故の直接の原因は、アルミニウムA2024-T3で作られた胴体最後部の半球状圧力隔壁の破壊であった。詳細な事故調査の結果、隔壁部に金属疲労特有のストライエーション模様が確認された事から、金属疲労に関する関心が一般市民にも強まる結果となった。機械設計の立場からは、安全寿命設計、フェイルセーフ設計と発展してきた設計思想を、更に損傷許容設計へと進める原動力となった。

金属は疲れる、すなわち疲労現象を生ずることは今からおよそ150年前に見出され、数々の惨事と尊い人命の代償として研究が行われて来ているが、未だに解決していない工学上の重要なテーマである。航空機も含めた機械、構造物の破壊事故の80%はこれら疲労によるものであるといわれている。金属が全体として弾性変形しか生じないような小さな力を加えた場合にも、その力が繰り返し加えられていると原子間にわずかなずれ(すべり)を生じて、これが次第に累積される。金属表面で最も弱い結晶粒に局所的にすべりが発生し、その結果として表面に凹凸ができ、力の繰り返しの伴ってこの凹凸が大きくなる。とりわけ、凹の部分に向かって深さを増し、やがて疲労き裂となる。このすべり、き裂の発生およびその後の伝ばは結晶内に存在する転位の挙動が重要な役割をする。

表面は材料の弱い部分であるから、表面を強化して疲労き裂の発生を抑制し疲労強度を向上させようと考え。表面強化処理は化学的、金属学的、機械的方法で表面の物理的、機械的性質を変化させて優れた表面層を形成するものである。具体的には、表面層に圧縮残留応力を発生させ、外部から負荷される引張り応力

を軽減させるもの、また表面の硬さを増したり、材料の弾性限度を向上させることによって、転位の運動を阻止してき裂発生を困難にするものなどである。

高エネルギーイオンを直接基板に蒸着させて生成される被膜は原子オーダや分子オーダで制御して形成されることから、様々の特異な機能をもった被膜を作り出すことができる。炭化物、窒化物、または酸化物等の高融点高硬度化合物の被覆法が開発されて、耐熱性、耐摩耗性を高める表面改質法が注目されてきている。私共の研究室では高硬度で化学的に安定なTiNやTiCのセラミックス薄膜に注目し、金属の表面にこれらの薄膜をPVD(物理蒸着)法やCVD(化学蒸着)法で蒸着した場合に疲労強度、腐食疲労強度の改善が図れないだろうかを検討している。材料内部に存在する転位が外力によってすべり運動して表面付近に近付いたとき、表面被膜からの反力を受けて金属内部のある位置で平衡状態となる。この位置は被膜と金属の組み



炭素鋼にTiNをCVD法によって被覆した材料の腐食疲労破断面：腐食疲労寿命は140%向上するが、被覆膜の割れによりその直下にピットが形成され疲労き裂の発生点となる

(大島誠司君撮影)

合わせ、被膜の厚さの影響を受けることが理論的に導ける。このことは前述した表面からの疲労き裂発生をおくらせる事にもなる。実験は回転曲げ疲労試験機と呼ばれる曲げ応力が30Hzの速さで繰り返し加えられる装置を用いている。この実験は実験室大気中および海水を模擬した塩水中で実施している。これまでに炭素鋼（S35C）にTiCを被覆した場合、空中疲労の耐久限度が10%強改善され、また塩水中の腐食疲労では $10^7$ 回疲労強度が80~140%改善される結果を得ている。これらは疲労き裂の発生を抑制する効果によるものであると同時に、腐食性環境下では環境遮断効果が十分に期待できることによる。

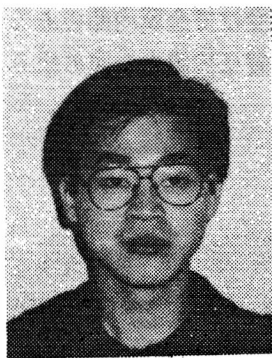
セラミックスは脆いと言う欠点がある。ある程度変形を加えると薄膜が壊れて、疲労き裂発生を抑止効果が

がなくなる。そればかりでなく皮膜に割れが入ると、それが切欠き効果として働き、逆に寿命を低下させる事も考えられる。被膜と金属との密着性と被膜作成方法、被膜形成時に導入される格子欠陥や残留応力、金属の組織変化など検討すべき課題は多い。原子や分子のオーダーで積み重ねた薄膜それぞれに特有な機能性を持たせる傾斜機能材料の開発も21世紀の新材料として、また宇宙開発への夢をのせて進められており、材料の信頼性向上も含めてこの分野の研究はやっとスタート地点に立った所である。

本稿では昭和62年度特定研究『セラミックス被覆による金属材料の環境強度向上に関する研究』の概要を紹介させていただいた。研究遂行上、多くの皆様のご協力を得ました、ここに感謝の意を表します。

## 留 学 体 験

外国人留学生（工学部） 郭 錦 祥（マレーシア）



昭和61年3月私は自費留学生として、日本にきました。日本に来てから約一年間、東京の国際交流日本語学院で日本語を勉強し、おととしの4月、富山大学に入学しました。

私はマレーシアのペナン島の出身です。マレーシアは多民族国家といわれています。

その中でマレー系、中国系、インド系という3主要民族から構成され、各民族がそれぞれの習慣、文化、宗教によって生活を営んでいます。マレーシアは細長い半島です。両岸は海に囲まれて、赤道に近いので、一年中暑いです。

真夏のマレーシアを離れて、飛行機が雲海を飛んでいる時、願望が達した喜びで胸がいっぱいでした。

高校生のとき、自分の将来のことを考えて、日本へ勉強に行きたいと思っていました。マレーシアは発展途上国です。いろいろな分野に専門家が必要ですが国内の大学が足りないので、毎年先進国へ行く留学生が多いわけです。数年前から、マレーシアでは「ルック・イースト・ポリシー」（東方を見よ）を提唱し、特に日本に学ぶことを勧めています。高校を卒業してから、母が私の希望どおりに日本へ出してくれました。

日本に着いた時、最初の約二カ月は生活習慣が違い、言葉がまったくわからないので、不便なことがたくさんありました。一番不便なのは住宅でした。私は友達と一緒に日本語学院の近くにある6畳の部屋に住み、お風呂もなく、日も当たらないのでなかなか寝ませんでした。日本語学校で一日四時間の授業があって、先生が日本語でいろいろと教えてくれました。一つのクラスには、約30人、そのうち、マレーシア、タイ、ホンコン、中国、インドネシアなどの留学生がいました。異国の学生たちと日本語学校で楽しい生活を過ごしてきました。一年後に、みんな、それぞれの大学、短大、専門学校へ入って別れ、私は富山にやってきました。

日本に来てから、いろいろなことを感じました。日本は狭い国で資源が少なく、人口が多いのですが、国民は一生懸命働いています。その結果いろいろな工業製品を輸出しています。今は世界の主要な輸出国になっています。優れた技術と新しい時代感覚を持っているので、経済の面で、常に新しいものをどんどん開発しています。

富山に来たばかりのころ、富山の雪はすごいとよく聞かされたので、とても心配しましたが、最近あまり降らないので、ほっとします。富山は季節の変化に富んでいて、春は桜の花、夏は梅雨、秋は真赤な紅葉、

冬は雪、四季おりおりの変化が大変美しいと思いました。町から見えるアルプスと呼ばれる立山連峰の頂の雪は夏になっても融けないのです。それに、それぞれ表情の違う五百羅漢、また世界でも有名なYKK工場なども見学しました。こういう自然、歴史、素晴らしい技術のある富山に来て、良かったと思います。富山県は冬になると雪が多く、寒いですが、人情が厚く、親切だと思います。時には富山弁でわからない言葉があれば親切に教えてくれます。私は日本語があまり上手ではないので友達が少なく、親しい友達と言っても

数人しかいません。これは残念なことです。

最近日本は企業による欧米との貿易摩擦で急激に、円高になってきました。日本に学びに来た私達は高い家賃と物価高、さらに円高という「ダブルパンチ」を受けています。きびしい生活に直面する私達、留学生に大学側は素晴らしい住まいを提供して下さって誠にありがたく、心から感謝しています。

最後に日頃親切に教えてくださる指導教官、そして、お世話になっている富山大学のみなさんに厚く御礼を申し上げます。

## 地域共同研究センターだより

地域共同研究センター助教授 池野 進



本年5月19日のセンター開所式らい約8カ月、当センターの活動は非常に活発に行われて来た。字数制限の関係から詳しく報告することはできないので、以下に日付をおって簡単に列挙する。

### 1. 講演会関係

今回企画した講演会は客員教

授を主体とし、今年度3回(客員教授は3人である)開催することとした。

#### ○ 第1回 講演会

第1回は電子デバイスをテーマとし、産、官、学から各1名の講師を選んだ。

日 時：昭和63年9月16日 午後1時

場 所：富山技術開発財団

参加人員：70名

- ① 演題：光電子集積回路技術の現状と将来  
講師：富山大学客員教授 片山 良史  
(光技術研究開発(株) プロセス研究部長)
- ② 演題：電子ディスプレイデバイスの動向  
講師：日本放送協会放送技術研究所  
映像デバイス研究部 主任研究員  
小島 健博
- ③ 演題：電子分光法とその薄膜評価への応用  
講師：富山大学工学部教授 龍山 智栄  
一人1時間程度の充実した講演の後、コーディネーターをセンター長の宮下教授が務めてパネルディスカ

ッションを1時間半にわたって行った。

#### ○ 第2回 講演会

第2回目は共同研究に主眼をおき、企業と大学における研究開発の現状に関する講演を計画した。

日 時：昭和63年11月10日 午後1時30分

場 所：富山技術開発財団

参加人員：90名

##### ① 演題：企業における研究開発の現状

講師：富山大学客員教授 廣田 栄一  
(松下技研(株) 常務取締役)

##### ② 演題：大学における研究開発の現状

講師：富山大学工学部教授 杉本 益規

参加人員は90名となり、企業の共同研究に対する興味の深さが伺われた。

#### ○ 第3回 講演会

第3回目は新素材関係を主眼としたが、範囲が広すぎるため、ニューセラミックに焦点を合わせた。今回は午前中から始めて、夕方まで講師4名の計画を組んだ。

日 時：平成元年1月24日 午前10時

場 所：富山県民会館

参加人員：65名

##### ① 演題：自動車工業を主体としたセラミックス研究利用の現状

講師：富山大学客員教授 新井 透

(株)豊田中央研究所取締役研究6部長)

- ② 演題：酸化物超伝導材料の現状と将来  
 講師：富山大学教養部教授 森 克徳
- ③ 演題：セラミックス加工技術の現状と将来  
 講師：鳥取大学教育学部助教授 中川平三郎
- ④ 演題：TiC-Cr<sub>3</sub>C<sub>2</sub>系複合セラミックスの強靱化について  
 講師：榑不二越 新素材開発部 主幹  
 蜂須賀武治

講演の後、コーディネーターを富山大学工学部時澤貢教授が務めてパネルディスカッションが行われた。  
 上記3講演会は主題に応じて電子電機工業会、経営者協会、技術交流クラブ等の協力を得て実施されたものである。

## 2. 技術研修会

日 時：昭和63年11月7日～16日  
 場 所：地域共同研究センター，工学部，教養部  
 受入人員：6名  
 テーマ：液晶パネルの作製，超伝導ペレットの作製  
 研修方法：各人が試作し，できたものを特性評価並びにSEM，TEM，オージェ分光分析

本研修会は，申込み企業6社を対象としてほぼ10日間行われた。

今回は初めてのことであり，ハードスケジュールとなる事を覚悟のうえで2テーマを平行させた。座学，総合評価等の教育も行った。内容が凄まじく豊富であったため，予想以上のハードな研修となり，今後実施する際の良い反省材料を得た。ご協力頂きました各先生方に，この場を借りて感謝申し上げます。

なお，座学，総合評価等で研修生の教育を戴いた先生は下記の方々です。

|           |       |
|-----------|-------|
| 富山大学工学部教授 | 多々 静夫 |
| 富山大学工学部教授 | 龍山 智栄 |
| 富山大学工学部教授 | 女川 博義 |
| 富山大学教養部教授 | 森 克徳  |

## 3. 第2回 経営者・研究者交流会

日 時：昭和63年11月30日 午後1時  
 場 所：工学部  
 参加人員：220名  
 プログラム：1 招待講演  
 2 分科会：討論  
 3 懇親会

前年2月第1回交流会を開催したときには，雪のある足場が悪いときにもかかわらず，200名を越す大盛況となったことから，今回も200名を対象として計画を組んだが，220名の参加となり，再び共同研究に対する熱意の大きさに驚かされた。

富山医科薬科大学等，県内7高等教育機関，各公設研究機関，各種団体の協力を得て，企業経営者，技術者等が富山大学に一堂に会した。

今回は共同研究の実態を知るために，文部省学術国際局から研究協力専門官の飛弾昌人氏を招いて「大学と産業会等との研究協力について」と題する特別講演を行った。続いて，電子デバイス・情報処理・人工知能，メカトロ・加工技術，新素材，バイオの4部門に分かれて分科会を行い，お互いの交流を図った。懇親会では，ひざを交え和気あいあい懇談がなされた。

## 4. 共同研究センター長懇談会

期 日：平成元年2月9日  
 会 場：豊橋技術科学大学 技術開発センター  
 共同研究センター等が設置されている大学10校が一堂に会し，センターの実情と問題点について話し合った。現在各センターとも共通した多くの問題点を抱えており，今後センター長会議として定着させることにより，一層の飛躍を期待するものである。

## 5. 講演と討論の集い

日 時：平成元年2月28日 午後2時  
 場 所：地域共同研究センター  
 参加人員：23名（定員20名）  
 テーマ：1/f ゆらぎと快適工学への応用  
 講 師：松下技研(株) 主任研究員 佐治 晴夫氏  
 （富山大学非常勤講師）

理工系大学院学生の創造力，独創力を養成する観点から，「CREATIVE POWER 養成講座」と称し，講演と討論の集いを計画した。

ユニークな講演の後，活発な討論が行われた。

学生諸君が研究者，技術者として社会に出た際の一助になれば幸いである。



◆ 工学部

編入学，推薦入学制度について

工学部は，平成元年度から工業高等専門学校からの編入学，工業系の高等学校からの推薦入学制度を初めて実施した。

1. 編入学について

編入学は，工業高等専門学校卒業生及び卒業見込者を対象とし，編入学の時期は，学年始めとし，編入学年は3年次である。

編入学試験は，定員に欠員がある場合に行い，平成元年度は3学科（電気工学科，機械工学科，化学工学科）が募集した結果，表1に示すように，全国から，電気工学科3名，機械工学科5名，化学工学科2名，計10名の出願があった。

編入学試験は，昭和63年11月9日に実施し，出願した10名が筆記試験（一般教育科目，専門基礎科目，外国語科目）と面接に挑み，電気工学科1名，機械工学科2名，計3名が合格した。

2. 推薦入学について

推薦入学は，高等学校の工業に関する学科を卒業見込の者を対象としている。国立大学95校のうち，工学部及び工学系大学で推薦入学制度を採用しているのは，新潟大学，福井大学，信州大学など35大学に達している。

推薦入学の募集人員は，各学科の入学定員の5%以内とされ，表2に示すごとく，電気工学科6名，工業化学科2名，金属工学科1名，機械工学科5名，生産機械工学科3名，電子工学科2名，計19名の出願があった。

推薦入学試験は，第1次選考は書類審査で，第2次選考は第1次選考合格者について，昭和63年12月7日に実施し，出願した19名が，小論文と面接に挑み，電気工学科2名，工業化学科2名，金属工学科1名，機械工学科5名，生産機械工学科2名，電子工学科2名，計11名が合格した。

表1 志願者状況一覧表

| 学 科 名 | 志願者数 | 出 身 地 |    |    |    |    |    | 計  |
|-------|------|-------|----|----|----|----|----|----|
|       |      | 富山    | 福井 | 東京 | 栃木 | 千葉 | 山口 |    |
| 電気工学科 | 3    | 1     |    |    |    | 2  |    | 3  |
| 機械工学科 | 5    | 1     | 1  | 1  | 2  |    |    | 5  |
| 化学工学科 | 2    | 1     |    |    |    |    | 1  | 2  |
| 計     | 10   | 3     | 1  | 1  | 2  | 2  | 1  | 10 |

表2 志願者状況一覧表

| 学 科 名   | 志願者数 | 出 身 地 |    |    |  | 計  |
|---------|------|-------|----|----|--|----|
|         |      | 富山    | 石川 | 兵庫 |  |    |
| 電気工学科   | 6    | 2     | 4  |    |  | 6  |
| 工業化学科   | 2    | 1     |    | 1  |  | 2  |
| 金属工学科   | 1    | 1     |    |    |  | 1  |
| 機械工学科   | 5    | 3     | 2  |    |  | 3  |
| 生産機械工学科 | 3    | 1     | 2  |    |  | 3  |
| 電子工学科   | 2    | 1     |    | 1  |  | 2  |
| 計       | 19   | 9     | 8  | 2  |  | 19 |



## 昭和63年度外国人留学生懇談会及び 工場見学会の実施について

### 1. 工場見学会

外国人留学生の学修の一環として、留学中に日本の企業の先端技術、経営管理等を見聞し、日本に対する理解を深めることを目的とする工場見学会を去る10月11日（火）実施いたしました。

本年度は、黒部市の吉田工業株式会社を見学し、同社のファスナー生産、アルミ建材生産等を見学し日本に関する知識、理解を深めることができ、有意義な見学となりました。

### 2. 外国人留学生懇談会

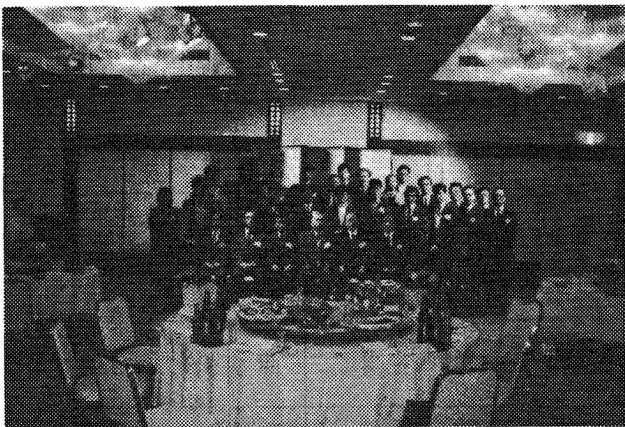
11月11日（金）高志会館において、本学に在学する外国人留学生・外国人研究員と大学関係者とが親睦

を深め、併せて留学生間の交流を図ることを目的として懇談会が開催されました。

この会には外国人留学生14名、学部派遣留学生（帰国者）1名に、大学側から、学長、学生部長、各学部長、国際交流委員会留学生部会委員、指導教官及び事務局長等が出席し盛大に行われました。

大井学長から健康に留意し初期の目的を達成されるよう激励の言葉があり、学生課長によって出席者が紹介され懇談に移りました。

中国、台湾、マレーシア、グアテマラの4か国が一堂に会し国際色豊かな中、終始和やかな雰囲気のもとにそれぞれ日本における生活体験を主に活発な意見交換が行われ、予定の2時間が短かく感じられる程でした。



### ○ 学生証の査証について

1・2・3年次生は、各学部の学務係（教養部及び経済学部においては学生係）で、平成元年度の査証を

行いますので必ず受けて下さい。

なお、査証を受けない学生証は無効となります。

## ○ 在来生合宿研修について

在来生合宿研修は、スキーを取り入れ1月7日から13日までの1週間にわたり、113名の学生が参加し、11名の指導講師のもとに志賀高原ブナ平スキー場を中心に行われた。

暖冬のため、富山を出発した時は全く雪がなく、現

## ○ 在来生合宿研修を終えて

長い伝統を誇る本学の在来生合宿研修は、今回も無事修了することができました。

今回は、降雪が早かったものの、1月に入ってから暖かい日が続きいくらか雪不足ではあったようでしたが、充実した合宿研修であったと思います。

全体を振り返ると、まず班編成を、生活研修班とスキー研修班と、2つの班編成を行い、参加学生を振り分けました。そして、スキー研修班は、1月8日の午前中に、それぞれの技術にあった班に編成しました。こうすることによって、学生の皆さんは、2種類の班で全体の日程を過ごすこととなり、より一層の学生間の親睦が図られ、また学生・教職員との親睦という面でも成果があったと思います。

スキー研修は、班編成の見極めから始まって、1日平均5時間を5日間、各班(A~K)のレベルに応じて行われました。そして、研修最終日の1月12日の午前中にブナ平の一角を使い、タイム・レースを行いました。参加者の皆さんは、4日間行ってきた研修の成果を確かめるように、また教官の先生方も滑行コースを滑っておられ、好評であったようです。

その他にも、「スポーツにおける自由と規律」というテーマで討論会を行ったり、映写会では、スキー技術の基礎・応用知識や最新の滑りを見てイメージトレ

地でも積雪が少なく心配しましたが、充実した研修を行うことができ、多大の成果をあげ、無事修了することができました。

これもひとえに指導いただいた諸先生方並びに体育会の学生諸君のおかげと深く感謝いたします。

実行委員長 中本 武史

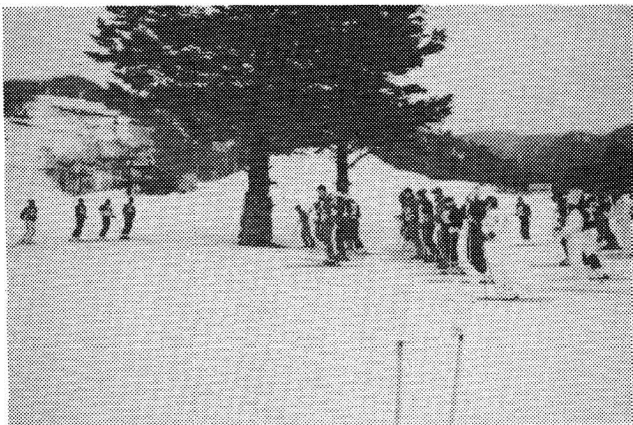
ニングを行い、内容の濃いものでした。

生活研修は、朝6時半の起床に始まり、夜10時に就寝するという規律正しい生活のもと、毎晩の班別ミーティング等を行い、時間をやりくりしながら親睦会を開き、教職員や学生間の交流を深めていました。また、学生間に大変人気のある、松明滑行と演芸会も例年通り行いました。上級班が松明を持って滑り降りてくる幻想的な光景を、残りの者が歌を歌い迎え、そして、松明の炎を全員で囲んで合唱した松明滑行。最後の夜に生活研修班ごとに考えた演芸を発表し、驚きや爆笑をまき起こし、フィナーレを飾った演芸会と、両方も学生生活に残る思い出となりました。

本研修の目的の1つである学生間及び学生・教職員相互の親睦という面では大きな成果があったとともに、自然に親しみ、スキーというスポーツ、規律正しい団体生活を通じて一層の人間形成が図られたと思います。

今後も、伝統ある本研修の意義や素晴らしさを認識し、1人でも多くの学生に、この貴重な体験をしてもらいたいと思います。

最後になりましたが、本研修に際して、絶大な御協力を頂きました学生部並びに指導教官の方々、そして清広荘の児玉夫婦はじめ職員の方々、志賀山リフト株式会社、本学スキー部諸君に心から御礼申し上げます。



## 平成元年度家庭教師斡旋希望者の登録手続きについて

家庭教師については、希望者が多いにもかかわらず求人数が少ないため、昭和62年度後期から登録制とし、登録者だけに斡旋する方法をとっていますので、斡旋を受けようとする学生は、下記により登録手続きをしてください。

なお、昭和63年度に登録手続きをした学生も新規に登録をしないと平成元年度は無効となりますので再度手続きが必要となりますので注意してください。

### 記

登録手続開始時期：平成元年4月1日（土）から随時

登録手続場所：学生部厚生課奨学係

持参するもの：印鑑

厚生課

### キャンパス樹木誌 (6)

モミ (Abies firma Sieb. et Zucc.) マツ科

山本周五郎の名作のひとつに「縦の木は残った」という小説がある。仙台藩のお家騒動を主題に、藩を取り潰そうとする幕府のさまざまな計略策謀から藩を守ろうと、誤解や身の危険を恐れず奔走する宿老原田甲斐の働きを描いたものである。題名が示すとうり、藩邸の中庭に植えられた一本の若い縦の木が、ちょうど狂言回しのように幾度となく見えがくれしながら、その物語の背景をなす一本の細い縦糸となって話を進めていく。

モミは日本の暖温帯を代表する針葉樹である。マツ科モミ属の常緑性植物で、四国、九州、本州西南部の山地丘陵地に、中部地方以北では太平洋側の低地に東

北南部にまで広く自生する。しかし日本海側では少なく、雪の比較的少ない海岸沿いの温暖なところに点在し、とびとびに山形県南部にまで達している。富山県では氷見の海岸に近い丘陵地に見られる。

日本に自生するモミ属の植物としては、モミのほかにウラジロモミ、オオシラビソ、シラビソ、トドマツなど5種類が知られている。一般に冷涼な気候を好むが、モミだけは例外的に温暖地を求める。そのためモミはこれら5種類の樹木の中ではもっとも低地や温暖地に生える。生育は良く、高さ30mを超える大木になることも珍しくない。風格のある樹木であるが、比較的短命なのと、栽培が難しいため庭園樹木としてはあまり好まれない。ただ神社やお寺の庭などにはときどきモミの大木を見ることがある。

本学キャンパスでは理学部2号館の裏、教養部自然系教棟との間の中庭に2本植えられているが、周辺に駐車する車にこすられて氣息えんえん、やっと生きているといったところである。

教養部教授 小島 寛



訂正（おわび）

○ 第62号（昭和63年12月10日）

・ 3ページ新任教官佐藤清人氏学歴年月「昭和63・3」を「昭60・3」に訂正します。

## <<<< 学園ニュース編集委員 >>>>

|      |    |    |
|------|----|----|
| 学生部長 | 瀧澤 | 弘  |
| 人文学部 | 河村 | 貞枝 |
| 〃    | 山口 | 幸祐 |
| 教育学部 | 吳羽 | 長  |
| 〃    | 原田 | 嘉昭 |
| 経済学部 | 山崎 | 清  |
| 〃    | 相澤 | 吉晴 |

|     |    |     |
|-----|----|-----|
| 理学部 | 松本 | 賢一  |
| 〃   | 広岡 | 公夫  |
| 工学部 | 島崎 | 長一郎 |
| 〃   | 杉本 | 益規  |
| 教養部 | 高安 | 和子  |
| 〃   | 山本 | 孝一  |